

# 奥州街道ぶらり散策

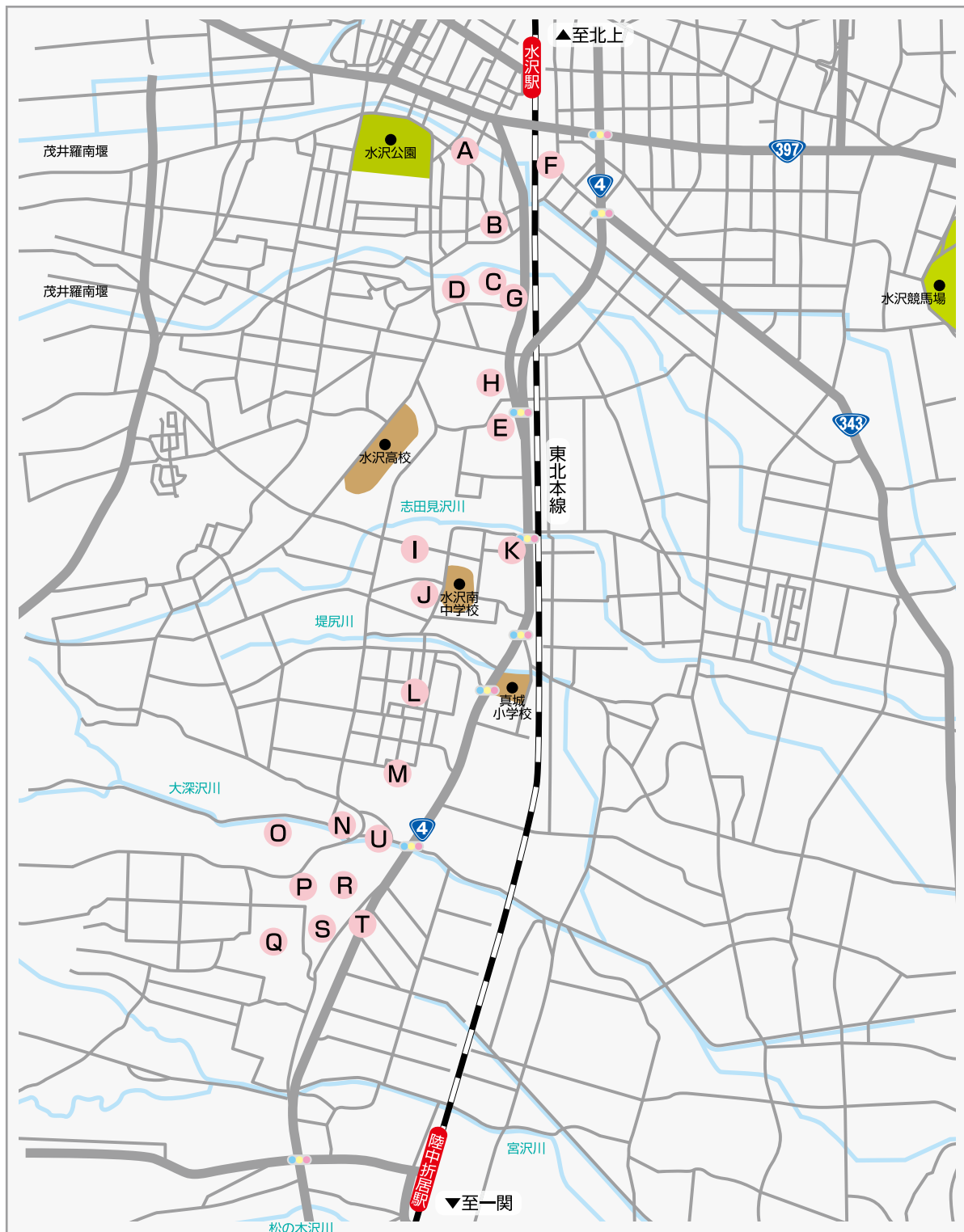
2011.7.23



妙法寺裏の十文字にある標柱

# 奥州街道MAP

南町にある標柱から  
真城の折居町まで巡り



※ Aは表の妙法寺裏の十文字にある標柱のある場所 (B以降は本文参照)

## 奥州街道の 成り立ち

江戸時代の幹線道路に東海道・中山道・奥州道中・日光道中・甲州道中・の五街道があり、幕府の道中奉行の管轄下にありました。奥州道中は千住宿から白河宿までですが、このうち宇都宮までは日光道中と重なるので、厳密には宇都宮宿の先の白沢から白河までの10宿となります。しかし、一般には青森県の北端の三厩までを奥州街道といい、全道中114宿の長い道のりでした。

なお五街道以外は、幕府の勘定奉行の支配下にありましたが、管理運営は該当する藩にまかされていました。(高倉淳「仙台領の街道」無明舎出版より)

特に、真城地区を通る奥州街道は、位置を変えながらの整備が活発だったと思われ、明治時代の鉄道開通時の近代まで続きました。



奥州街道の桜並木 (袋町裏)

水沢市史より

## 真城地区の街道あれこれ

### 奥州街道

気仙街道 (小山崎から姉体・黒石まで)

白山道 (大深沢から白山まで)

その他に仙北街道 (水沢から秋田の増田まで)

水沢を軸とする道には、仙北街道、気仙街道 (盛街道)、東山街道 (黒石街道) などがあり、これらはみな仙台藩主の管理に任されていました。

昔の大道は、幅が三間半 (普通は三間約7m近く) で、中道が二間、小道が一間で、道程は小道六里 (400m = 36町 = 1町が60間) が大道一里になる割合でした。

幹線道路には、整備が終わると松並木など植えられました。以前はその景色が多く見られましたが、今はその姿を残すところも少なくなりました。

街道には、追分石 (道標の石) があり一里塚もありました。追分石は、東街道、仙北街道に今でも多く残っています。

# 奥州街道の切替

(真城折居から袋町に至る街道)

はじめは、折居の宿（※間宿）から西へ坂をのぼって、上台を通り、沢、谷を越えて（中林遺跡に道跡あり）、真城の浜田、塚を経て、水沢の大鐘から水沢公園東の愛宕社参詣道に入り袋町に至るものでいたが、明暦4年（1658）頃に切替となり、上台下を小山崎に至り、坂を越えて松原法華寺（妙法寺）後ろから袋町七軒小路（水沢町の南出口＝南町）に抜けました。

この道は新道といい昭和初期まで水沢農学校の桑園（実習地）になっていましたが今はありません。切替えられた道はさらに明治19年頃再び切替られ、現在の小山崎の東下を廻り袋町端の七軒小路につながりました。（「水沢市史3より」）

現在、妙法寺の裏の十字路には標柱（右は旧仙北街道、左は旧奥州街道）があります。その後、小山崎から南町への通りに切り替えられて、今の経路に変更されました。

※道路の改修は沿道の大名の管理下に行われていましたが、実際は村の責任において行われていました。仙台領の南端越河から北限の相去まで宿駅は31で、大藩にふさわしく数も多く、宿駅距離は平均1里29町余で、東海道の平均2里11町余に比するとはるかに短くなっています。岩手のみを示すと、一ノ関、山ノ目、前沢、水沢、金ヶ崎、相去があり、これらは「本宿」と呼ばれるもので、宿と宿の間にあるのが「※間宿（合宿）」で、折居、瀬原、下川原、黒石鶴城はその例です。

「水沢市史3より」

## 奥州街道名

(時代とともに変わる呼び名)

平安時代（平泉の時代）の街道→陸羽街道

江戸時代の街道→奥州街道

明治時代の街道→函館街道





## 街道近辺の見どころ

### ② トロッコ 営林署の森林軌道 盛んだった伐採材搬出



現在は市道になっている  
「森林軌道」跡（山崎町地内）

土木工事現場や鉱山の鉱石搬出などに便利な小型レール状の手押し車「トロッコ」。昭和年代の戦前・戦後には河川改修工事や土地改良区画整理造成工事に大活躍しました。長距離輸送を必要としながらトラックが普及していないころには、ディーゼル車で牽引される「軽便軌条上」を走る四輪台車もトロッコと呼ばれました。

大正13年（1924）6月、水沢営林署が国鉄水沢駅構内の南端に貯木場を設け、ここを起点に奥羽山系の国有林から木材を搬出するための「森林軌道」を敷設しました。

軌道は、水沢袋町から真城小山崎を経て大鐘、福原、胆沢広岡、同出店、同愛宕、同馬留地区などを経由して西へと進み、現在建設工事中の胆沢ダム現場付近で山岳に入り「猿岩」を抜ける約40kmの距離でありました。

トロッコ列車は、最盛期には伐採された木材を連結台車に満載。「ガタンゴトンゴーゴー」という重い金属音を軋ませながら1日3往復の割合で走りました。当時、営林署

に従事する作業員も多く、地域雇用にも貢献しました。

しかし、海外からのやすい木材輸入などが国産材の需要減に拍車がかかり、さらに森林保護が叫ばれて林業のスリム化が図られ、「森林軌道」の役割も終わりました。

その後、トロッコ線敷設路は市町道として払い下げられ、周辺の開発も進んで、今はその面影を残す場所を見届けることが難しくなっています。

「真城の記録誌」より

### ③ 齋藤墓地 （大林寺墓地）



齋藤墓地とも言われるこの場所は、曹洞宗森城山大林寺墓地の別名で、東北本線の建設によって町の区画や道路の建設に伴って開かれ、大林寺から最初に齋藤實の墓が移されてから、この名で呼ばれるようになりました。また、生前の春子夫人は、毎月26日に人力車で墓を訪れお参りしていたそうです。



さらに齋藤墓地には、江戸時代前期に 仙台藩伊達家で起こったお家騒動「伊達騒動」で、当事者の一人と言われた原田甲斐(原田宗輔)の妻の墓があります。昭和 45 年(1970)NHK の大河ドラマ「樫の木は残った」(山本周五郎の歴史小説)が放映され、原田甲斐(原田宗輔)を主人公とした物語が放映されましたが、同年に「原田甲斐妻の墓」の碑が建立されました。

また、水沢にキリスト教を根付かせた明治時代初期の宗教家で神学者である山崎為徳の遺髪が、山崎家の墓に納められているそうです。

## D 小山崎刑場と隠し念仏 山崎空左衛門



卍南無阿弥陀佛



山崎大導師殉教報徳の碑



山崎空左衛門の墓

仙台藩の刑場で、片子沢地内にあります。

胆沢地方に多くあった「隠し念仏」にかかわる伝えがあり、布教者であった水沢留守氏家臣山崎空左衛門が、本願寺の寺方より「真宗の教義」に反するものと訴えられ、また、仙台藩には「犬切支丹」と決めつけられて、宝暦 4 年(1754)磔刑された所とされます。

また、この法難以後処刑地を小山崎と称するようになったとされ、現在は山崎大導師殉教報徳の碑が建てられています。

また、水沢にキリスト教を根付かせた明治時代初期の宗教家で神学者である山崎為徳の基地は京都市左京区にあるのですが、この山崎家の墓には遺髪が納められているそうです。

## E 一里塚 (西側)



江戸時代、お江戸日本橋を起点として一里(約 4 km)毎に、五街道の道の両側に対につくられた土盛りの塚を言います。この塚は、胆沢郡内に置かれたハカ所の一里塚のひとつで(奥州街道三十番目)、土塁の高さは一丈、面積は三十六坪あり、東側は半分くらいの大きさであったとのこと。

昭和 45 年(1970)、水沢バイパスの開通により東側の塚は破壊され、残った西側の一基も落雷で大杉が枯れ、現在は塚の中央に根元部分のみが残された形となりました。

旧胆沢郡で位置が確認できるのは、ここと金ヶ崎町の「三ヶ尻」の二基だけです。奥州街道の切り替えが(一部路線変更)明暦 4 年(1658)頃行われたことから、この一里塚の築造年代は、江戸初期 17 世紀中頃以降と考えられます。

## F 鉄道建設と奥州街道



大正 13 年頃の姉体道路踏切



昭和 52 年の様子

東北本線建設の工事は、水沢の町や道路の開発を伴い明治 20 年（1887）工事が開始されました。

南町を出て堤尻に至る奥州街道と平行する形の鉄道工事は、街道を通行する人馬の危険を避けるための対策もありました。鉄道と街道の間に「せき」を掘り、小山崎あたりからはヒバ垣を植え仕切りました。また、塩加羅付近は湿地帯で、深いせきの状態が続きました。鉄道は、明治 23 年（1890）11 月、一ノ関～盛岡間が開通しています。

東北本線の鉄道が開通のころ、姉体方面への道（通称「姉体道路」）は、南町を出てすぐ鉄道を越える踏切がありました。

昭和 52 年（1972）7 月の「広報水沢」には、当時のものと思われる写真が掲載されています。（左写真）

姉体街道は「藤橋」の完成で気仙沼街道となり、国道 343 号線が通りました。

写真 「広報 水沢」より

## G 片子沢館（半白館）

### 一、位置（水沢区真城字片子沢）

県道（旧国道）佐倉河・真城線を東に、茂井羅南堰を北にした約 20 m の高さにある大林寺墓地のある場所です。

### 二、規模や構造

現在は、墓地と住宅地になっており、北側にある茂井羅南堰のそばの低地は公園になっています。南側と西側はひらけていて、舌状の台地となっています。

瀬台野村「風土記御用書上」（安永風土記—安永六年）によりますと、瀬台野村片子沢館、東西六十五間、南北五十式間とあります。当時をしのばせる遺構として、台地南側の空堀（約 30 m）と、東側傾斜面の古い石垣だけとなっています。

### 三、歴史

前述の瀬台野村「風土記御用書上」によりますと、「右御城主井年号共相知不申但当時ハ畑ニ罷成居申候事」と書かれているだけで（封内風土記、胆沢風土聞記など）、古館の存在は認められていますが一切が不明となっています。

水沢風土記第四巻に、片子沢館（半白館）として、半白館の名前の由来（この館に顔の半分が白い狐が棲んでいた）と、葛西時代四百年間続いたのち葛西氏幕下として共に滅びたと書いてあります。（根拠・出典については書かれていません）なお、「葛西氏家臣衆座列」に片子沢氏（館）は書かれていません。推定ではありますが、中世末期に滅びた須江城が約 200 m 南にあったので、片子沢館は、中世中頃には滅びた館ではないでしょうか？

「真城の記録誌」より





## 須江城 (四郎館) 跡地



水沢職業訓練所への上り坂  
右側奥に城跡はあります

### 一、位置(水沢区真城字中上野)

水沢区街地の南 1.5km、現在の水沢バイパス南入口付近の国道西面の山裾に見られるのが、昔の須江の集落です。そして、集落の中で一番高い所にある佐藤氏の屋敷付近が城館の跡となります。

### 二、規模

高さ 15 m、東西 70 m、南北 100 m の丘一帯が城館の跡でありました。しかし、今は佐藤氏屋敷やその他の住宅地及び造成地と変わり、地ならしが行われた関係で、一切がまぼろしの城跡となりました。

ただ、跡地には今でも館のお稲荷さまとして稲荷神社が祀っており、昭和 18 年神楽を奉納したとされています。また、祠は南と北に 2 ヶ所ありましたが、やはり城跡の高台が宅地に造成されたことにより、現在は 1 ヶ所のみとなっています。

古老の話によりますと、以前は西南部に曲線状に土塁が積まれ、北側には空壕跡も残っていたと言います。おそらく土塁と空壕(水壕)によって囲まれた、楕円形平山城形式のものであったと推定されます。

「風土記」には根岸の「四郎館」として、東西三拾間、南北五拾六間とあり、「仙台領古城書上」には、東西二十四間、南北四十五間と記録されています。(仙台領古城・館 第一巻)

### 三、歴史

城主は「風土記」に須江ノ四郎、「古城書上」には須江の清右衛門と伝えています。「岩手県管轄地誌第六号之十一」によりますと、「「季広館」ト云フ 本村ノ西北字中上野ニアリ 葛西の臣蠣崎季広 天正年間之ニ居レリト云フ」とあります。どのようにしてこの地に住み着いたかは不明ですが、おそらく須江氏が葛西氏の家臣として住んだものと推測され、天正年間の諸戦闘に参加して滅亡したものと思われます。

なお、前述の城主のところで「葛西の臣蠣崎季広 天正年間之ニ居レリト云フ」とありましたが、葛西氏また柏山氏の家臣団の中に「蠣崎」の姓は見あたりません。現在「蠣崎」の姓は、青森県の三戸、八戸地方にみられます。[真城の記録誌]より

その後の調査によりますと、「蠣崎氏」は「青森県むつ市の蠣崎村」出身で、その後は蝦夷地に渡り、季繁-光広-義広-季広-慶広と続きましたが、慶広の代になり豊臣秀吉から認められ松前氏を名のり一大名として認められました。蠣崎義広は天文 14 年(1545)死去し、季広が家を引き継ぎアイヌに対応しています。

現在、松前氏の直系は蠣崎氏を名のり函館市に住み、弟は盛岡市に住んでいます。(H26.4 書き加え)

## ① 南中学校への通学路と村境の景色



堤尻川を越える道は少なく橋もありませんでしたので、通学には回り道をしていました。

昔の人は、沢を下って登る「越え道(こえどう)」という、石を並べた道があったと言います。

真城村と小山村の境となる上野地区は、昔はほとんどが森で、山菜やキノコなどが取れる豊かな土地でありましたが、終戦後に本格的な開拓がなされました。



## 「塚」の跡



J



K

ここは地名字「塚」の由来と思われる多くの塚があったところで、中学校の校門付近や校庭の東には大きな塚がありました。現在も大塚一基が残っています。

塚は、通常村境にある藩境塚や、道の距離がわかる一里塚などで、秋成地区には、市指定の史跡として一里塚の案内板があります。

塚にはその他に大切なものを埋めるなど、墳墓としての役割もあります。

## L 真城ヶ丘団地遺跡

昭和47年、水沢市開発公社が市内真城雷神地区に上野団地造成中、発見された集落跡です。直ちに水沢市教育委員会が主体となって調査団を編成、同年9月緊急調査を実施しました。調査の結果、段丘東周縁部に沿って約30棟の竪穴住居跡群が確認され、内20棟余りの発掘を実施しました。

出土遺物には、土師器（長胴甕、杯、甑）、須恵器（長頸壺、短頸壺、杯、大甕）、鉄製品（鎌、刀子、釘）、砥石、炭化穀物などがありました土師器、須恵器ともにその成形技法の上に古い手法が見られることから、胆沢城創建期（9世紀前半頃）に近い時期と考えられています。このことは、当遺跡の放射性炭素による年代測定結果のA.D.850ともおよそ合致します。

また、この集落の中心から南へ約250mのところに合わせて口甕を埋めた土器が検出され、その他にも性格不明のピットや溝が検出されています。

この時期の古代集落としては、水沢はもとより県内でも類例は極めて少ないものであり、この遺跡の立地する水沢から前沢にいたる胆沢扇状地の扇端部崖線上に、連続的に遺跡が存在することが判明してきました。



真城ヶ丘団地遺跡竪穴住居跡

水沢市史 1（原始・古代より）

## M 浜田屋敷と 浜田寅之助の墓

古い記録に「浜田屋敷」というのがあり、「安永風土記」には当時大深沢屋敷二軒とありました。

屋敷跡は確認できませんが、明治まで続く墓地があり、そこに浜田寅之助の墓碑が建てられています。地名の浜田はここからきているものと思われます。



## N 陸羽街道＝古坂

むかしの、車もない、人が歩くだけで十分だった道路の時代は、坂道が多くありました。多くの人が歩き、馬が歩き、荷車を使うようになると道路は平らな方が楽であり、次第に平地に道が造られるようになります。

古坂の道は、坂上田村麻呂が蝦夷征討の際に通った坂であるとされています。中林の遺跡に発見された陸羽街道と結ばれる道と考えると、この先がまた楽しい発見へとつながりそうです。



## O 亜炭の採掘跡

草原地帯であったこの地方には、貴重な燃料となる亜炭の採掘跡が残っています。

亜炭は、大昔の木や草が重なり地中に推積した層であり、もっと地中深くなると石炭になっていたかもしれません。

## 馬籠館と館地名の多さ

永正4年(1507)葛西氏が治める時代、家来である馬籠長之助が、宮城県本吉郡馬籠よりこの地に来て館を造り住みました。

天正19年(1591)には伊達領になり、馬籠氏は仙台に移り、弟宗氏が跡を継ぎ、母方の姓の千田氏を名乗り定住しました。

伊達二代当主が鷹狩に来た折り、千田家にて休み一服したと風土記に書いてあります。

奥州街道に沿ったこの地に人々が住み、屋敷を構えたことから、この地には館の名前や屋敷名が今に多く残っています。

## P 中林遺跡



中林の発掘調査された遺跡は、この付近一帯に何ヶ所もあり、広範囲に及ぶ遺跡があることから大きな集落であったと思われます。

遺跡からは多くの種類の土器が出土し、住居跡やたくさんの柱穴や石斧も確認されていることから、今から1200年程前ころの「計画された集落」と考えられる、貴重な遺跡とされています。

遺跡からは「稲」を栽培した畠跡が見つかり、水の便が良くないこの地では「陸稲＝オカボ」が栽培されていました。アテルイの頃と重なる時代ではないでしょうか。

遺跡には他に街道と思われる、造られた道路の跡が発掘されています。昔の道の姿が、現在につながるロマンを感じさせます。

平成2年度に、水沢市教育委員会が中林A、中林B遺跡として二箇所を試掘を実施し遺跡の範囲確認調査を行いました。

中林A遺跡では、縄文中期の土器片(大木8b式の甕、鉢)と石器(擦石、凹石、敲き石)が出土しましたが、住居跡は確認されませんでした。

中林B遺跡では、竪穴住居跡が10棟検出され、そのうち3棟が詳しく調査されました。3棟とも隅丸方形で、壁ぎわにカマドをもっています。出土した遺物は、土師器と須恵器であり、杯、甕、長頸瓶などです。遺構・遺物から時期は9世紀後半(平安時代初期)、坂上田村麻呂が造営した鎮守府胆沢城の後に作られた集落といえます。

「岩手県水沢市文化財報告書22集」より



## Q 小牛田神社と折居小学校跡



小牛田神社は旧奥州街道沿いにあります。この街道は、明治維新の戊辰戦争時に、折館へ向かう大砲を積んだ荷馬車が登ったと言われており、今もその面影を残した貴重な道となっています。

また、この小牛田神社には、折居町出身の大関男山が世話人となって、谷風一門と建立した伊勢の海の石碑があります。

明治時代になると教育の重要さが認識され、教育は子どものうちからと各地に学校が設置されました。

小学校は住民人口 600 人を基準にして学区を定め、真城地区にも多くの学校が造られ、一学級を 6 ヶ月間として 6 歳から 14 歳までの子どもたちが勉強に励みました。

折居の小学校は生徒数が 30 人で、その時の住民人口が 1626 人との記録が残っています。その後度々の学制改革で義務教育制になり、全ての子女が等しく学校教育を受けられる世の中になりました。

折居地区には、歴史に裏付けられた坂の名前がたくさんあります。

折居坂・熊堂坂・病院坂・バツカリや泣き坂等・・・。

## R 熊堂坂（病院坂）と熊野神社

並木街道の昔村役場があったと言われる付近から、小道に入る熊堂坂の坂を登りきるところにこの神社があります。

熊野信仰は、世界遺産に登録された和歌山県熊野地方の、険しい山々で修業する修験者の行いが熊野詣として広まり、全国を巡業する人々により各地に信仰が開かれ、熊野神社が建立されたと思われます。

山形県羽黒山などの出羽三山も同じ修験者の道場となっています。



## S 病院跡 村役場跡

旧街道には、病院がありました。病院坂という俗称が残っています。

病院の近くには役場もあり、明治元年（1868）になると、行政組織も変わり行政区として村がつくられる中、折居にも村役場が置かれました。

また、この時代は行政機構も度々変更されていました。

役場は、その長に任命された人の住宅が役場で、戸長役場と言われたりしました。





## ㊦ 奥州街道の 桜並木

街道は時代と共にその位置が変わります。

昔、西の山の尾根を通った道は次第に平地近くなり、安倍道、安倍貞任を追う源義家が通る小山付近から、平泉藤原時代の北大門があったとされる折居より西に登り、折館大深沢へとつながる古坂へ変わりました。

江戸時代になって駅(宿場)が確立し、今では桜並木の景色が残っています。

また、この景色は「奥州街道と桜並木」として水沢のふるさと名所 50 景に指定されています。



旧街道の見事な桜並木が、「真城音頭」の CD ジャケットになっています。

## ㊦ 大深沢川と 親水公園



平成 2 年(1990)、かんがい用水事業により大深沢を「コンクリート水路」にする計画が提示されたことに対して、「子どもたちに魚やホタルの棲む昔ながらの川を残したい」との思いから、地元のみなさんが「ふるさと水と土のふれあい事業推進委員会」(後の「大深沢水園委員会(千葉弘委員長)」)を組織し、自然との共生を大切に川づくりに取り組んで出来たのが、この公園です。

平成 13 年(2001)の完成後は、花壇づくり等の活動を行っており、夏にはホタルが舞い、人々が集い、川端で談笑のできるコミュニティ水園となりました。

また、この活動に対して、平成 15 年(2003)には、(財)あしたの日本を創る協会が主催する、全国「ふるさとづくり賞 集団の部」の「主催者賞」を受賞しています。

